



Title	Giraudoux劇の女性-Electreの問題
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	études françaises. 1973, 11, p. 81-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93630
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Giraudoux 劇の女性— Electre の問題

赤 木 富 美 子

18世紀初頭の女性観の検討をつづけていて、われわれは、ある知的グループのメンバーに共通して見出される一つの考え方に注目してきた。

自然から与えられた感受性、やさしさ、献身といった女性的な特徴を高く評価して、だからこそ女性は男性よりすぐれたものであるという女性論がそれである⁽¹⁾。M^{ne} de Lambert のサロンがその中心であり、Fontenelle 劇や Marivaux 劇もその一例であるが⁽²⁾、*Lettres persanes* に紹介されているように、これは、男性の特権が不当であるという説や、教育を平等にすれば、果してどちらが上になるかという疑問提出にもなった⁽³⁾。しかし何よりも、女性の天与の特質として、直観的に真実に到達できる感性を重視する点に特徴があり、その変化、発展や、社会的背景との関連は、面白い問題である。前回私たちは、このような女性論が、歴史の中にたどった一つの流を仮定してみて、その中に Giraudoux 劇の女性たちをおいてみようを試みたのである⁽⁴⁾。

そして Giraudoux 劇では、本能的な感受性のおかげで、女性たちは、空虚な抽象概念や、誤った幻影からまぬがれていること、人間に一番必要なものを知る力を与えられ、人間存在をまもるのに最も適したものとして描かれていることなどを証明した。女性らしい魅力を具体化した女主人公、*Amphytrion* 38 の Alcmène に注目し、そのような愛を理解し、女性が本能によって知っていることを、経験によって知った行動のチャンピオンとして、*La guerre de Troie n'aura pas lieu* の Hector を考察した。女性の、真実を見る力にかけられた期待の大きさを量り、そこから *Sodome et Gommorrhe* で、完全な couple が世界を破壊から救うという設定がなされている理由を導き出した。しかしこのような女性観を、誤りのない結論

にするうえに、ここに、なおざりにできない大作 *Electre* の女主人公 *Electre* が残されたのである。何故なら、その伝説のはじめから今日まで、*Electre* は何よりも復讐の煽動者であり、時には彼女自身殺害者であり、いつでも愛よりも正義の使者だからである。(P. Brunel: *Le Mythe d'Electre* 参照) Giraudoux は一体、この女性のどこに魅力を見出したのだろうか？

とにかく、この問題にとりかかる前に、Giraudoux の *Electre* を解釈する場合、誰もが、おちいりやすい誤謬をまず指摘しておきたい。それは、*Electre* を Hector の antipode として考えることである。例えば R. M. Albérès はその *Esthétique et Morale chez Jean Giraudoux* の中で、Egiste が、町を救うために、一日だけ自分の命をのばしてくれとたのむのに対して、*Electre* が、たとえ一国民が滅びても、つらぬかねばならぬ真理があると答えたことをあげ、こういう態度は、Hector が決してとらないところだとしている。「何故なら、と彼は言う。Oïax が Hector を侮辱して、《お前は卑怯者だといわれても、戦を宣しないのか、》と言った時、Hector はそういう侮辱は、耐えられる種類のものだと答え、国を危くするような戦をさけるためには、平手打をうけても、我慢するのだから」⁽⁵⁾。——このような意見は、*Electre* をも、Hector をも理解せず、単に末梢的な比較に終った誤の典型といえる。*Electre* の側からこれが誤っていることを証明するのは、この小論のおわりにゆずることにして、今、Hector の側からだけ、この説の誤を証明しておこう。

Hector には、*Electre* のように、多くの命とひきかえにでも守りたいものが何もないのだと考えるのは誤である。Hector は、何もかも犠牲にして戦さえ避けられればよいと言っているのではない。たゞ、愚にもつかぬ浅薄な観念のために、人間にとって、もっとも大切な幸福を犠牲にすることはできないと言っているのである。Hélène というつまらぬ女性の去就

を問題にすることもそうした観念の一つであり、平手打で名誉が傷つくと思うのもその一つである。R. M. Albérès は、少しも注目しなかったが、酔っぱらった Oïax が、Andromaque をからかった時、Hector がだんだん投槍に近ずき、それを取りあげる場面を否定することはできないだろう⁽⁶⁾。大切なものを守るためには、Hector は自分が戦のきっかけになることさえも辞さないのである。Hector は Electre と同じ位潔癖であることの証明は、これで充分だと思う。今度は、Electre は果して Hector の antipode ——観念をかゝげて破滅を要求する主人公なのかどうかをみてゆこう。そのために、Electre が、どんな女性として描かれているかを検討するのが、順序だと思われる⁽⁷⁾。

*

ところで、Giraudoux 劇では、既婚の女性と未婚の女性の描き方の間に、相違があるというのは、よく指摘されるところである。例えば、フランスの教科書の設問などにも、こういった種類のものが、よく見受けられる。《N'y a-t-il pas une différence entre les jeunes filles et les femmes mariées? Laquelle?》: *Nouveaux classiques Larousse, La guerre de Troie n'aura pas lieu*, p. 36, question 7). しかし、Giraudoux の作品全体を読んでもみると、その相違は、既婚未婚というような、はっきりしたわけかたには、よらないことがわかる。この点を明らかにしながら、まず *Judith* の女主人公 Judith と *Pour Lucrèce* の Lucile 夫人を取りあげてみたい。彼女達は、Albérès が Electre に関して言った「絶対的要求」⁽⁸⁾を持った女性達だと思えるからである。

Judith はユダヤの町で一番美しい娘である。町は異教の王 Holopherne によって包囲され、殺りくが明日にも始まろうとしている。この時予言者たちは、町で一番美しい娘が、異教の王を誘惑し、暗殺して町を救うのだと叫び出し、町中の人々が Judith の名を口にしはじめる。はじめの中 Judith は、自分には神の啓示がないことから、予言は疑わしいとして、そ

んな大役を引受けようとはしない。しかし町の防衛に行っていた男友達の一人から、味方の兵士たちはすっかり敗北していて、危険はほんとうにせまっているのだと知らされる。彼女は男たちの不甲斐なさに腹を立て、《Hideux, tu es hideux! Quelle lèpre que la défaite sur un uniforme!》(acte I, scène 5, t. I, p. 188) と罵る。そして、《Est-ce donc un crime d'avoir rêvé que le nom juif dût être celui d'une race de vainqueurs? Est-ce ma faute, si tes camarades passent aux femmes leur tâche et leur honneur?》(Ibid. p. 189) と蔑み、たゞ一人敵の王をたおすため出かける決心をする。こゝまでの Judith の行為全体は、傲慢といってよいものである。彼女は、自分をもっとも美しい、もっとも有能な人間だと思ったから傲慢なのではない。(事実彼女は、《la plus faible et la plus anonyme》(acte I, scène 8, t. I, p. 200) なものとして出かけるといっている)。男性たちの卑怯さ、敗北を許すことができず、祖国の誇が傷つくのを我慢できない純粋さを傲慢というのである。罵られた Jean は言う。《Tu es Jeune, Judith》. Judith—《Que saurai-je, plus vieille?》. Jean—《Que pour les soldats, il n'y a pas la victoire et la défaite, l'opprobre et la gloire: il y a le combat, dont elles sont les faces, éclairées ou sinistres.》... Judith—《Si c'est avec l'ironie que la cavalerie défend maintenant les villes, je comprends leur perte.》(acte I, scène 5, t. I, p. 189). Jean の言うように「この世のあらゆる真の力、嘘も復讐も毒も悪徳⁽⁹⁾」も知らず、彼女の敗者に対する罵りは、勝利者への微笑と同じくつまらぬものにすぎない。(Ibid.). 自分にも他人にも、たゞ一つの弱さも欠点もゆるさぬ要求を持ったこの娘が、人間の暖い真実の世界を見るためには、手ひどい屈辱を受け、全く弱いものとしての自分を自覚し、自己嫌悪を知る必要があった。敵の王を籠落し殺害するために敵地にのりこんだ Judith は、味方の裏切りで、計企を知った敵兵に謀られて、王が偽者であることを見抜けない。みんなの嘲笑の中で Judith は、はじめの意気どみを忘れて、敵の王に救をもと

め、その人間らしい寛い心にはじめて愛を知る。Holopherne —《Je suis l'ami des jardins à parterre, des maisons bien tenues, de la vaisselle éclatante sur les nappes, de l'esprit et du silence. . . . Je t'offre ces musiciens que tu entends, qui chantent des chants et non des cantiques. Ecoute-les. Leur voix meurt doucement au dessous d'eux, autour de nous, et n'est pas aspirée au ciel par un terrible aspirateur》(acte II, scène 4, t. I, p. 218). この人間的な、暖い具体的な世界の愛を知った Judith の変身を、王は次のように言う。《Que tu es belle, Judith, et soudain simple !》(Ibid)。この劇の結末は Judith が王を殺害することで、予言が成就されることになっているが、(Giraudoux は定った筋に二重の意味を与える方法をとっていて、これは伝説を素材にした場合、当然である。), 私たちの問題にとって大切なのは、この劇で、娘であることに与えられた特徴をあきらかにすることである。すでに見たように、それはまず、自分の世界に完璧を要求する傲慢であり、抽象的な観念に生きる純粋さである。このような美しい不遜は、自分の中に、具体の世界の支配を、人間らしい欠陥を見出すことによって失われるべきものとして、すなわち、Giraudoux 劇の真に女性らしい女性の前段階として描かれている。そして娘たちは、これらの頑なゝ外面にかゝわらず、いっもこの女性の世界を、うちに秘めていることを、Judith の変身は告げている。Holopherne——《Le secret de cette fureur, de ces yeux secs, de ce désordre》. Judith——《Oui, quel est-il ?》. Holopherne——《La douceur.》(acte II, scène 4, t. II, p. 216) と、Holopherne は見抜いて言う。そしてこのような変身は、未婚とか既婚とかで規定されるものではない。同じことを、*Pour Lucrèce* の Lucile 夫人の分析によって検討してみよう。

*

情事はなやかな Arles の町に、新しく赴任して来た若い検事夫人 Lucile は、道徳の権化のような潔癖な心の持主である。情人のある妻や、浮気な

妻を持った夫が、彼女の前に現われると、彼女の目には本当に嫌らしい虫が這いまっているさまが見え、彼女は言葉さえかわさないで、忽ち有名になった。彼女に答えてもらえるかどうかは道德の試金石のようになって、Armand は彼女の輕蔑から信じ切っていた妻 Paola の不実を知る。このように、潔癖や純粹さの特権は、必らずしも未婚の女性のものにかぎらないことが、これでも明らかである。

自分にも他人にも、一つの欠点も許せないというのは、自分の中に弱さを認めない、自分の中の弱さを知らないことからくる。だからこの劇でも、Lucile 夫人の純粹さは、人間らしい愛を、まだ理解しない、無自覚なものとして、まず描写される。罪を告発された Paola は、すべての女に存在している罪を、Lucile 自身の中にも秘かに巣くっている罪を、見ていないことを烈しく咎め、Lucile の心のすみずみまでを告げてやって言う。《C'est la part avertie et simple qui parle à la part compliquée et niaise (acte I, scène 8, t. II, p. 474) Lucile の信じている道德は卒直に自分を見ない、勿体ぶった偽善《Fausseté!》(Ibid. p. 473) なのである。この劇でもまた、Lucile 夫人が、欺されることによって屈辱を知り、謙虚に自分の中の弱さを見て眞実を知ることが必要だった。Paola の策略にかゝり、Lucile 夫人は、Paola の情人でもあった Marcellus 伯爵に犯されたと思ひこむ。この事件を契機として、彼女は、自分と夫との愛は思っていたほど完璧なものではなく、自分もまた Paola と同じ、不道德な素質を持っていることに気づく。この怖しい発見をした後で、それにたえられないで、彼女が自殺の道をえらんだ時、はじめて彼女は天使の資格を得、10年に一度位姿を現わす純粹さの尖光となるのである。《la vertu d'une femme c'est celle de toutes les femmes, dans l'univers entier et dans le ciel elles sont pures de ta puraté en ce moment》(Barbette の科白, acte III, scène 7, t. II, p. 521)

この二つの劇のどちらの場合にも、自分の弱さを知らず、他人を咎める

傲慢は、真実を見いだすまでの姿、いわば（真実を知るものとしての）女性の前身として描かれている。そしてほんものの純粹に至るためには、この無知の傲慢は、徹底的に打撃をうけることになっている。つまり、他の人間を咎め、破滅させるような道徳的な女のあり方は、完全に否定されているのである。

さて、私たちは、Electre がこのような「女性の前段階的存在」として描かれていないことに注目したいのだが、その前にもう一人、Electre 解明にあたって重要な意味をもつ娘がある。Imtermezzo の Isabelle である。この劇は、幽霊が登場する幻想的なものであるが、Isabelle に与えられている特徴は、娘だけの持っている特権として、幽霊たちの世界を信じることができる点にある。がっちりと冷やかに出来上った既成の人間社会に、はまりこんでいるのでなく、世界の事物の一つ一つに宿る魂を信じているのである。頑なな大人の世界の偽善や偏見から解放されていて、自然の美しさに十分にふれながら生きている。だから Le droguiste の言うように彼女の前では、《la chauve-souris, la chouette, commencent doucement leur ronde...》(acte I, scène 7, t. I, p. 272) なのである。人間の世界の汚濁を咎めるのではなく、彼女はたゞその中に浸っていないだけである。彼女には、死者たちが彼女のそばへ来ようとして、小さな懸命の努力を続けているのがわかる。彼女はやさしい愛でそれらの魂を迎えてやろうとして、幽霊を待つ。このようなやさしさと自然の感能を備えたこの娘を、劇は、《femme parfaite》⁽¹⁰⁾ として表現している。

しかしこれらの娘たちの特権も、彼女たちが恋人を見つける時には、失われてしまう。幽霊は歎いて言う。《Mais soudain l'homme arrive. Alors toutes elles le contemplent... Alors c'en est fait—c'est fini !》(acte III, scène 4, t. I, p. 313). Isabelle の特権は、否定されるべきものとして描かれているのではないが、人間世界の現実に出て失われる非常にもろいものとして捉えられているという意味で、女性の前段階的な状態ということ

ができる。そして自然と交感することのできる、純粋なこの娘の特権が、もろさの故になおさら、美しく、哀惜をもって描かれていることを頭において、Electre の検討にうつりたい。

*

Electre が Hector の antipode でないこと、正義という観念の固まりで、不正なものの破壊を要求し、相手に、罪のない人々を救う余裕さえあたえない、こわばった心の持主でないことを証明するために、まず私たちは、祖国愛の権化のような Judith と、道德の化神 Lucile 夫人とを考察した。そしてこれら二人の女性の傲慢や潔癖は、自分の中の人間らしい現実にふれて、否定されるべきものとして描かれていることに注意した。他人を容赦しない、この純粋さは、自分自身の弱さ、暖い人間の欠点に、必らず一度は衝突し、傷けられなくてはならない。いわば、真実を知る女性となる前の、前段階的存在として描かれていた。

Electre を見る時、彼女の純粋さが、彼女の追求が、彼女の傲慢《Voilà où t'a menée l'orgueil, Electre》(deuxième Euménide: acte II, scène 10 t. II, p. 91) が、決して変身前の前段階的なものとして描かれていないことに気がつく。このことは、つまり Electre の全存在が、劇の中で一度も否定されるべきものとして描かれていないことを意味する。Judith や、Lucile 夫人は、自分の中に、あらゆる悪徳も可能な、情念をもった女を発見することで、夢のような観念の世界から出て、真実の世界を見る。しかし Electre は、そのような女というものをよく知っている。よく知った上で彼女は、その世界に入ることを拒否しているのである。何故なら彼女は、目の前に、Clytemnestre を持っているから、そして彼女は厳密に自分を検査し、Clytemnestre に似ていないことに固執しているから。《Je ne te ressemble en rien. Depuis longtemps, je ne regarde plus mon miroir que pour m'assurer de cette chance》(acte II, scène 5, t. II, p. 65) 彼女は母と同じ立場にたって見るのがどんなことがよく知った上で、それを烈し

く拒否している。Clytemnestre—《Nous sommes femmes, Electre, nous avons le droit d'aimer》. Electre—《Je sais qu'on a beaucoup de droits dans la confrérie des femmes. Si vous payez le droit d'entrée, qui est lourd, qui est d'admettre que les femmes sont faibles, menteuses, basses, vous avez le droit général de faiblesse, de mensonge, de bassesse. Le malheur est que les femmes sont fortes, loyales, nobles. Alors tu te trompes. Tu n'avais le droit d'aimer que mon père》. (acte II, scène 5, t. II, p. 65).

そして特にこの点が、Giraudoux の Electre の特徴といってよいと思われる。それは、他の著名な Electre と比較すれば、一そう明らかになると思う。例えば、Euripide の Electre は、惨めな境涯の中で、母のきらびやかなぜいたくを嫉み、Oreste のためらいにもかゝらず、母を殺すためにおびきよせ、あらゆる嘘と策略とを用いる。烈しい情念に動かされている《névrose》⁽¹¹⁾ として描かれていて、まこと、P. Brunel の言うように、《une femme égarée — une autre Clytemnestre》(*Le Mythe d'Electre*, p. 111) なのである。Sophocle の Electre は、幼い Oreste を自ら救って逃がした⁽¹²⁾ ほどの男まさりの女性だが、やはり憎悪の烈しさで、母に似つつあることを告白している。《Je sais que mon attitude ne sied ni à mon âge ni à ma naissance ; mais ton acharnement contre moi et ta conduite forcent mon naturel. Le mauvais exemple est contagieux》。⁽¹³⁾

Le Mythe d'Electre に抜粋集録されているだけでも、20に余る劇作家によって描かれているこの女性を、すべての作品について検討することはできないが、対照をきわ立たせる意味で、次に、Sartre の *Les Mouches* に出てくる Electre を見てみよう。Sartre 劇の上演は、ずっと後年で、source としての意味はないが、理論的には féministe だった筈の Sartre の Electre が Giraudoux のそれよりも、ずっと古くさいのは面白い。Sartre は Electre が、第二の Clytemnestre でしかないことを、力説して描き出し

ている。Judith や Lucile 夫人について用いた言葉を使うならば, Electre は Clytemnestre の前段階状態なのである。《Ce que je hais en toi, と Clytemnestre は言う, C'est moi-même... Ce n'est pas ta jeunesse, — oh non — c'est la mienne》。⁽¹⁴⁾

これら三人の Electre と異り, Giraudoux 劇では, Electre は Clytemnestre の正反対のものとして描かれている。まず, 最初に Oreste の思い出の中で語られる姉の姿が印象深い。それは何よりもきよらかで, 落ち着いた, 賢い女性である。《Je me rappelle surtout deux petits pieds tout blancs, les plus nus, les plus blancs. Leur pas était toujours égal, sage, mesuré...》(acte I, scène, I, t. II, p. 14) そしてこの美しいイメージは最後まで変わらない。Le Jardinier —《Electre est la plus belle fille d'Argos》. Le Présidente —《Et pour droite elle est droite. Comme toutes les fleurs qui ne croient point au soleil》. L'Etranger —《Est-elle alors arriérée, sans esprit ?》. Le Président —《L'intelligence même》(acte I, scène 2, t. II, p. 18)

さらに具体的に, この点を, Euripide や Sartre の, 烈しく, 惨めな Electre と比べると, イメージの対照はより明確である。前者では Electre は《Regarde la saleté de ma chevelure et ces vêtements en haillons》⁽¹⁵⁾ とその惨めな様子を見せびらかし, 《Toi aussi tu as une nature violente》⁽¹⁶⁾ と Clytemnestre の科白で描写されている。後者でも, その顔つきで, その情念の烈しさに, Electre はまた母に似ている。Clytemnestre は, 《J'ai eu ce visage pointu, ce sang inquiet, ces yeux surnois et il n'en est rien sorti de bon》⁽¹⁷⁾ と若い日の自分を Electre に見出し, この類似について意見を求められた Oreste は, 《Que dire ? Son visage (de Clytemnestre) semble un champ ravagé par la foudre et la grêle. Mais il y a sur le tien comme une promesse d'orage : un jour la passion va le brûler jusqu' à l'os》⁽¹⁸⁾ と, 情念の烈しさの類似を肯定する。明らかに Sartre は,

Electre を Clytemnestre の前身と見て、二人を同じ女性の種族として描こうとしているのである。

Giraudoux の Electre は、情念の囚である母とこの点でも対照的である。Electre の許婚者である jardinier は、Electre が怒るなどということを信じられない。《contre quoi s'acharne Electre ?》といふかり、彼女が怒るのなら、《Ce serait la première fois qu'on verrait se fâcher Electre》と保証している。(acte I, scène 2 & 4. t. II, p. 21, 31). 他にも、《Electre est pieuse, tous les morts sont pour elle》(Ibid. p. 21) と彼女のもの静かさを語る科白は多い。

*

以上、Giraudoux 劇の Electre が、他の作家のそれと異って、Clytemnestre と正反対の女性として描かれていることに重点をおきながら、彼女の性格を明らかにすることができたと思う。純粹で、賢く、もの静かな、この Electre は、Giraudoux 劇の、他の魅力ある女主人公たち、Alcmène や Isabelle と同じ、「完全な女性。」を思いおこさせるのだが、特に、次の二点について、このことを強調したい。

その一つは、Isabelle が、持っていた特権、自然の中で、人間を越えた、万物の世界を愛する特権である。Electre は、自分の支持者として、いつも植物や花の世界の証言をかりることができる。《A part toi, à part les hommes, il n'était rien dans le palais qui n'attendît mon père avec moi, ... Cela commençait le matin, Mère, à ma première promenade sous ces tilleuls qui te haïssent, qui attendaient mon père, Cela continuait à midi, quand j'allais au torrent, le plus fortuné de nous tous, qui lui pouvait bouger, qui attendait mon père》(acte II, scène 5, t. II, p. 66)

そしてこゝでもまた、Clytemnestre との鮮かな対照によって、この美しい特権が、浮彫りにされている。たとえば、Clytemnestre は、花園についても、汚ない農作業しか考えることができず、軽蔑しか感じない。

Le Jardinier —《Reine, Vous pouvez me refuser Electre, mais ce n'est pas loyal de dire du mal d'un jardin qu' on ne connaît pas》. Clytemnestre —《Ose parler de ce jardin! Tout y est sec, je l'ai vu de la route: un crâne pelé.》(acte I, scène 4, t. II, p. 35) このように彼女は、花園に近づくことさえなく、たゞ庭師の身分を、卑しむ。《à ta main sale, à tes ongles noirs...》(ibid). これに反して、Electre にとっては、この花に囲まれた庭が、たゞ一つの憩いの場所なのである。Jardinier は証言する。《Je n' ai jamais vu sourire Electre, mais c' est dans mon jardin que j' ai reconnu sur son visage ce qui ressemble le plus au sourire !》(ibid). また彼は、《Elle (Electre) adore mon jardin. Les fleurs, ... lui feront du bien》(ibid. scène 2, t. II, p. 21) とも言っている。

第二は、幼いものの存在をまもる注意深い配慮と、献身で、この点は、Electre を特に Alcmène に近づけている。Oreste が赤ン坊の時、母の手から落ちた事件をめぐって、Clytemnestre と、Electre が、言い争う場面がある。Clytemnestre は、Electre と Oreste を左右に抱いていたのだが、Electre が押したから Oreste が落ちたというのが彼女の言分である。Electre は、そんなことがあったら、自分は壁に頭をぶつけて死んでしまうとまで烈しく否定する。Oreste の服の色についても、Clytemnestre はモーブ色だといふ、Electre は青だという。また Clytemnestre は Oreste が抱かれていたのは右だといふ、Electre は左だといって、二人の意見は、ことごとに対立する。Clytemnestre は、わずか一年三ヶ月の幼い娘が、そんなことを覚えているわけがないと言って、Electre の誤を主張するが、こゝで Electre が、でたらめを言っているかどうかは、非常に重要な意味をもっている。何故なら、もしこの、押した、押さないの問題で、Electre が嘘を言っているのだとしたら、彼女が父の死について Oreste に明らかにすることも、すべて嘘だということになるからである⁽¹⁹⁾。

この重要な問題をとく鍵を、劇は、Electre と Clytemnestre の性格分析に賭け、その役を Mendant にさせている。(この役は、Louis Jouvet を念頭にかゝれた彼のはまり役であった)。彼の推測は次のようである。まず、右腕か左腕かの問題は、Clytemnestre が二人を、両手に抱いていたのだから、当然、相当重くなっていた Electre を右に、Oreste を左にしていた筈であり、Electre の言うのが正しいことになる。また、押したかどうか、の問題は、Electre が、Oreste を、しっかりと支えている今の姿から考えて、彼女が弟を押すなどとは、あり得ないことである。Mendant —《Moi, je ne crois pas qu'elle ait poussé. Regardez - la : à deux pouces au - dessus du sol, elle tient son frère endormi aussi serré qu'au dessus d'un abîme》(acte I, scène 13, t. II. p. 49) これに反して、女王の方は、眠っている間に子犬をつぶしてしまう牝犬に似ていると彼は言っている。事実、Oreste の転落を防ぐために、母としてとるべきどんな手段でもあったのに…、と Electre が抗議する時、Electre には全く母親らしい配慮と本能をかねそなえた一人の女性の姿が見られる。《Et moi je me disais, dès que je l'ai vu glissant : au moins si c'est une vraie mère, elle va se courber pour amortir la chute. Ou elle va se plier, ou se voûter, pour créer une pente, pour le rattraper avec ses cuisses ou ses genoux》《Ou elle va s'incliner en arrière, de façon que le petit Oreste glisse d'elle comme un enfant de l'arbre où il a déniché un nid. Ou elle va tomber, pour qu'il ne tombe pas, pour qu'il tombe sur elle. Tous les moyens dont une mère dispose pour recueillir son fils, elle les a encore.》(acte I, scène 4, t. II, p. 37) これに対して、Clytemnestre は、私が一寸でも動いてごらん、今度はお前が落ちていたところだったと答える。そしてこの答こそ、Electre の非難するところである。Electre —《C'est bien ce que je dis. Tu raisonnais. Tu calculais. Tu étais une nourrice, pas une mère !》(ibid). このことは Mendant も同意見である。《Mais elle est égoïste.

Pour elle, la femme compte autant que l'homme, parce qu'elle en est une... elle ne songe pas une seconde à détruire cette fille à ventre pour sauver ce fils à souche, et elle garde Electre》(acte I, scène 13, t. II, p. 49)

以上の例で、私たちは、Electre が、Giraudoux 劇の理想の女性の特質を、—— Isabelle や Alcmène のあらゆる美しさと美徳を——備えていることを明らかにできたと思う。

*

そこで私たちは、次の大切な点、Electre が劇の中で果す役割について、調べてゆかなければならない。勿論、伝説の枠の中で彼女の役割をすっかり変えてしまうことはできないのだが、Giraudoux 劇は、彼女に、特に、真実を見いだし、それを告げるという、選ばれた女性の役割を、果させようとしているのが目立つ。しかも彼女は、この真実を、推理や推論によって見いだすのではなく、ある感覚に導かれて、そこに到達する。この重要な点でも、Electre は、私たちが、Giraudoux 劇の女主人公たちを分析して、(「*Sodome et Gommorrhe* の問題」。⁽²⁰⁾) 得た結論に一致していることを心にとめておきたい。

まず彼女は、Egisthe と Clytemnestre に何ともいえぬ嫌悪を覚え、そのうえ、それがいつも同種のものであることを感じている。《Je ne le sais pas encore. Je sais seulement que c'est la même haine. C'est pour cela qu'elle est si lourde, pour cela que j'étouffe. Que de fois j'ai essayé de découvrir que je haïssais chacun d'une haine spéciale》(acte I, scène 8, t. II, p. 42) そして彼女は、母への憎しみは、Oreste を手から落した故だと考えたり、Egisthe は Oreste の王位を奪ったからだと考えたり理由をみつけようとするが、どうしてもできない。二人の人間に共通な重い憎しみが押かぶさるようにつれてくる。《une vague plus lourde et plus chargée de haine commune s'abattait à nouveau sur eux. Je les hais d'une

haine qui n'est pas à moi》(Ibid.) そして Oreste の帰ってきた夜、彼女は、父の死が事故でなく、父は殺害されたのだということをはっきりと感じとる。《il y avait dans son vêtement un pli qui disait, ie ne suis pas le pli de la mort, mais le pli de l'assassinat. Et il y avait sur le soulier une boucle qui répétait : je ne suis pas la boucle de l'accident, mais la boucle du crime...》(acte II, scène 3, t. II, p. 61)

この発見につづいて、母が父を憎んでいたこと、母の愛しているのは Egisth だということなど、つぎつぎに真実が明らかになってゆくのだが、この真実を告げることによって、彼女は Oreste を直ちに復讐へ向かわせることになる。Oreste は、《Et tu savais cela, et tu m'as laissé dormir toute une nuit !》(Ibid.) と、真実を知るとすぐ行動に移るのだから、真実の重さは、他の Electre 劇と比較にならないほど大きい。

女性是这样して、感性によって真実を知る力を持っているものとして描かれ、それる告げる役目を強調されている。《Elles ne sont faites que pour cela. Epouse, belles - soeurs, belles - mères, toutes, quand les hommes au matin ne voient plus, par leurs yeux engourdis, que la pourpre et l'or, c'est elles qui secouent, qui leur tendent, avec le café et l'eau chaude, la haine et l'injustice et le mépris du petit bonheur.》(acte II, scène 3, t. II, p. 62)

Sartre の劇で、《Je cracherai au visage》⁽²¹⁾ と Oreste を叱咤し、Euripide 劇でためらう Oreste を母殺しへ追いやる⁽²²⁾、怒り狂った女性からは遙かに遠いのである。

*

しかも彼女は、こうして真実が明らかになると、一国民の滅亡とひきかえにしても、妥協しようとはしない。Oreste が、全ての責任をひきうける英雄として描かれている Sartre 劇で、憎しみの情念のまゝに、Oreste をそゝのかしておきながら、母殺しの後で、急に怯気づいて後悔する弱々

しい女⁽²³⁾と、Girandoux 劇の Electre は、全く異ったものである。

それでは、Electre は、正義のために何ものも容赦せぬ、頑なな道德の石頭なのだろうか。今までに検討した彼女の描写から考えても、そんなことはあり得ない。

この潔らかな、落着いた、賢い娘の全体を動かしているものは、では何だろうか。この最後の問題にとりかゝって、私たちは、Giraudoux 劇の女性像を完成させたいと思う。

*

Euripide や Sartre の劇では、Electre の、Egisthe や Clytemnestre に対する憎しみは、日常の、惨めな、生々しい現実で、はっきりと裏打ちされている。Euripide 劇の Electre は、あわれな農民に嫁いで、水汲み、機織りも自分でやり、労働に日を送りながら、ぜいたくに埋もれた母を呪い続けている⁽²⁴⁾。Sartre 劇の Electre は、《La dernière des servantes.》⁽²⁵⁾と自分を呼び、〈Je lave le linge du roi et de la reine, ... Je fais la vaisselle aussi.》⁽²⁶⁾と、ひどい生活を語っている。

Giraudoux 劇の Electre が宮殿の中で占める位置は、割合自由であり、警戒はされていても、虐待を受けていないことは確かである。彼女は夜毎、父の墓に詣でることもできるし、《Elle va chaque nuit sur la tombe de son père》(acte I, scène 2, t. II, p. 20) 自分の選んだ部屋に住んでもいる。だから、彼女の憎しみは、現実的な日常生活から来たものではない。では、どのような動機が、彼女の行動の原理になっているのだろうか。劇の最初から、その表現を追って、それを求めてみよう。

遠い流浪の旅から帰ってきた Oreste が、初めて姉の部屋の窓を眺めるところから始めよう。Le Jardinier —《La voilà, la fenêtre d'Electre》. L'Etranger (Oreste) —《Pourquoi si haut, presque aux combles ?》. Le Jardinier —《Parce que, de cet étage, on voit le tombeau de son père》. L'Etranger —《Pourquoi dans ce retrait ?》. Le Jardinier —《Parce que

c'est l'ancienne chambre du petit Oreste...》. (acte I, scène I, t. II, p. 15)

はじめの、この紹介は重要である。Electre は何よりも、亡くなった父の思い出に生きる娘として描かれており、その愛と、殆んど同一のものである弟への愛で生きている女として現われる。Clytemnestre の思いも及ばなかったひたむきな愛で、彼女は Agamemnon を愛していたのである。彼女が母を、自分の地位の篡奪者として憎むのもそのためである。Electre —《Voilà que j'ai fait la main de mon frère, ... Voilà que j'ai fait la poitrine de mon frère... Voilà que je fais son oreille... Prends de moi ta vie, Oreste, et non de ta mère !》 (acte I, scène 8, t. II, p. 41)

彼女が卑しい庭師との結婚を承諾するのもそのためである。彼が父の花園の庭師だったからである。Electre —《Je sais que vous avez formé tous deux le projet de me marier au jardinier de mon père. J'accepte》 (acte I, scène 4, t. II, p. 34)

彼女は10年間、かえらぬ父への愛だけに過してきた。《... mais dix ans j'ai attendu mon père. Le seul bonheur que j'aie connu en ce monde est l'attente.... J'attendais, debout sous la lune, pendant des heures, immobiles, ... sans penser, sans vivre, ... Où en serais-je s'il n'y avait pas encore des heures où j'attends encore, où j'attends le passé, où je l'attends encore !》 (acte II, scène 5, t. II, p. 66) 省略したが、この部分の美しい長科白は、死んだ者への、それ故他の Electre の憎しみのように烈しさのない、ひたむきな、この娘の愛のあり方を表現している。

最後の、もっとも大きな証明として、Electre の行動の力が、すべてこの父への愛からきていることを示す科白をあげることができよう。Clytemnestre が、父といっても、5才の時から見も触れもせぬものをと軽蔑の言葉を投げると、Electre はそれは大切な問題だと答えている。《De qui me viendrait ma force, de qui me viendrait ma vérité, si je n'avais pas touché mon père vivant ?》 (acte II, scène 8, t. II, p. 79). そして、母が見

張っていたにも拘らず、Agamemnon が殺害される寸前に、父を迎え、父に触れたことを重要なこととして証言する。《C'est moi qui l'ai retenu. J'étais dans ses bras. . . . De ma joue contre sa joue, j'ai appris la chaleur de mon père.》(acte II, scène 8, t. II, p. 80). 何故、このことがそんなに重要なのか。それが彼女の行動の一切を支える理由であり、原動力だからである。Isabelle の霊との交感と異り、この愛は、個別的であり、具体的であり、力強い。《Par fois, l'été, le monde entier a juste la tiédeur de mon père. J'en défaille. Et je l'ai étreint de ces bras. Je croyais prendre la mesure de mon amour, c'était aussi celle de ma vengeance.》(Ibid.) 以上、Electre の行動のすべての底に、彼女の存在そのものの底に、具体的な父への愛があったことが明らかになったと思う。最終の場面で、生前の父を知っていて讃美してくれる女にあっただけで、Electre は叫ぶ。《Appelle-moi ta fille. femme Narsès, je suis ta fille. . . 》(acte II, scène 9, t. II, p. 89).

*

では、そんなにもひたむきな愛で、愛していたものを殺された場合、人はどうすればよいのだろうか。何ものにも妥協せず、何ものとも取引しないで、贖いを求めるのが正しい。それが愛するということである。愛するものの存在をまもるのが、女性の特色であると、先に私たちは結論したが、それも、この強い強い復讐の念に変わりうるほどのものでないとしたら、たゞの弱さと憶病にすぎないであろう。Electre は、Amphitrion を殺された Alcmène である。全能の神とでも、自分たちの幸福を、ひきかえようとしなかった Alcmène のように、Electre もまた、贖いをもとめるためには、Argos の町が焼かれて、人々が殺りくされても問題にしない。一国の滅亡を救うために、妥協やごまかしを重ねるのは政治家の仕事である。Egisthe は町を救うために、Oreste と Electre をすぐ殺すべきであった。そうしなかったのは、Egisthe の誤りであって、Electre の責任ではない。

《Tu parles en jeune fille, non en roi》と言われて、《Je parle en femme》と Electre 自身も言っている。(acte II, scène 8, t. II, p. 82). Egisthe が、人民というものを《C'est un immense corps à régir, à nourrir》と理解しているのに対して、Electre が、《c'est un regard étincelant, à filtrer, à dorer... ces énormes prunelles de vérité》と感じているのはその証拠でもある。(Ibid.)

そしてまた、Argos の町のことを思い人々を救おうと思うことができるためには、自分の愛が救われねばならないのだ。自分に納得のいく世界でなければ、破滅しようとうとうとうと、誰が気にかけるだろうか。贖いがなされた時、町は生きかえるだろうと言う Electre の科白はこの事実を示している。

先に見たように、彼女は、人間の真実に触れて自分の中に変化を認める Judith や Lucile と異り、また Sartre の Electre や Euripide の Electre と異り、母を殺した後にも、決してとり乱したり後悔したりしていない。このことは、Electre が暖い人間らしい愛から出発して真実を追求してきたことを証明している。Egisthe と Clytemnestre が死んだ時、彼女は何ものでもなくなり、「何も持たなくなった」のも事実であるが（というのは、愛するものを失った人間にとっては、復讐しかあり得ないが、しかしその復讐も、何のたしにもならないこともまた事実だから）この行為そのものは、劇を通じて、全面的に支持されていると考えてよいであろう。《Cela a un très beau nom, ... Cela s'appelle l'aurore》(acte II, scène 10, t. II, p. 92) という最後の科白がその証明である。

祖国への愛も、平和の希求も、具体的な暖い人間一人一人の愛がなければ、意味のない言葉にすぎない。どんな観念も抽象的にとらえず、人間性に関する問題を、すべて具体的な個人の生をとおして、とらえようとした、Giraudoux 劇の特色が、こゝにも見いだされる。Electre を、こうした具体的な愛によって、説明することによって、Giraudoux 劇は、彼女を、

Hector の antipode である破壊者や、観念の奴隷でなく、まさしく Giraudoux 劇の女性の一人として、形づくり得たのである。

(texte : J. Giraudoux, théâtre, 2 vol., Grasset, 1954)

註

- (1) 拙論「18世紀初頭の女性論—M^{me} de Lambert の場合」(大阪外国語大学学報18号1968)
- (2) 同じく「*L'Ecole des Mères* と *La Mère confidente* についての一考察」(大阪外大フランス研究会誌 *études françaises*, No. 9, 1970)
「Marivaux 劇と Dancourt 劇における娘たち」(*Gallia*, X-XI 号, 1971)
「Fontenelle の劇作品における娘たち」(*études françaises*, No. 10, 1971)
- (3) «C' est une autre question de savoir si la Loi naturelle soumet les femmes aux hommes. «Non, me disait l' autre jour un philosophe très galant : la Nature n' a jamais dicté une telle loi. L' empire que nous avons sur elles est une véritable tyrannie ; elles ne nous l' ont laissé prendre que parce qu' elles ont plus de douceur que nous, Pourquoi aurions - nous donc un privilège ? Est - ce parce que nous sommes les plus forts ? Mais c' est une véritable injustice. Nous employons toutes sortes de moyens pour leur abattre le courage ; les forces seraient égales si l' éducation l' était aussi. Eprouvons-les dans les talents que l' éducation n' a point affaiblis, et nous verrons si nous sommes si forts» (Montesquieu : *Lettres persanes*, Lettre XXXVIII, Rica à Ibben, éd. Garnier, p. 82)
- (4) 「Giraudoux 劇における女性—(*Sodome et Gommorrhe* の問題)」(大阪外国語大学学報29号1972)
- (5) «Ce marché, Hector, dans *La guerre de Troie n' aura pas lieu*, l' aurait accepté. Hector défend le bonheur et la paix contre les exigences de l' honneur national. A Oïax il offre des excuses et, lorsque ce dernier lui dit : Il va jusqu' à accepter la gifle d' Oïax Il convient d' observer qu' ici Electre inflige un démenti très net à Hector» (op. cit. p. 404-5)
- (6) *La guerre de Troie n' aura pas lieu*, (acte II, scène 14)
- (7) Giraudoux の *Electre* を《orgueilleuse et perverse》と判断した, Marianne Mercier - Campiche の意見 (*Le Théâtre de Giraudoux et la condition humaine*, Domat, 1954) もあることを紹介しておくのも無駄ではないと思われる。以下に証明するとおり, 私たちはこの意見を受入れることはできない。
- (8) «l' exigence supérieure et abstraite» 《L' intransigeance》 (Albérès. op. cit.)

- p. 405)
- (9) «toutes les vraies forces du monde, mensonge, vengeances, poisons et vices» (Judith, acte I, scène 5, t. I, p. 189)
 - (10) Le Droguiste –«Isabelle est si simple, si nette, si différente en somme de ses compagnes !» (acte I, scène 3, t. I, p. 254) Le Contrôleur –«il est anormal qu' il existe un être aussi parfaite qu' Isabelle» (acte II, scène 3, t. I, p. 283)
 - (11) P. Brunel : *Le Mythe d' Electre* の意見. (p. 111)
 - (12) «Ai-je hésité, moi, quand je l' ai dérobé (Oreste) à la mort ?» (Sophocle : *Théâtre complet* traduit par R. Pignarre, Garnier – Flammarion, p. 161)
 - (13) Ibid.
 - (14) Sartre, *Les Mouches* (acte I, scène 5,)
 - (15) Euripide : *Théâtre*, traduit par H. Berguin et G. Duclos, Garnier, 1954 t. I, p. 83
 - (16) Ibid. p. 120
 - (17) Sartre : *Les Mouches* (ibid.)
 - (18) Ibid.
 - (19) Mendiant の証言 «C' est l' histoire de ce poussé ou pas poussé que je voudrais bien tirer au clair. Car, selon que c' est l' un ou l' autre, c' est la vérité ou le mensonge qui habite Electre, soit qu' elle mente sciemment, soit que sa mémoire devienne mensongère» (acte I, scène 13, t. II, p. 49)
 - (20) 大阪外国語大学学報29号 1972
 - (21) Oreste –«S'il (Oreste) était las de tout ce sang ...». Electre –«Alors je lui cracherais au visage et lui dirais : «Va – t'en, chien, va chez les femmes, car tu n' es rien d' autre qu' une femme» (Sartre : *Les Mouches*, acte II, scène 4)
 - (22) Oreste –«Hélàs ! Comment tuer celle qui m' a mis au monde et nourri ?» Electre –«Comme elle a fait périr ton père et le mien». Oreste –«O Phoibos, quel oracle insensé as – tu rendu ...». Electre –«Si Apollon est insensé, qui est sage ?» ... Oreste –«Je ne pourrai jamais croire que cet oracle est juste». Electre –«Prends garde de faiblir et de tomber dans la lâcheté. Va !» (Euripide ; Ibid. p. 115-116,)
 - (23) Electre –«Je ne veux plus t' entendre. Tu (Oreste) ne m' offres que le malheur et le dégoût. Au secours ! Jupiter ... protège – moi. ... Je me repens, Jupiter, je me repens.» (Sartre : *Les Mouches* (acte III, scène 4,)
 - (24) Euripide : *Electre*, ibid. p. 80-90)
 - (25) Sartre : *Les Mouches* (acte I, scène 4)
 - (26) Ibid.